

ゆいしき
「唯識」という生き方(3)
 最終回

横山 紘一



横山 紘一 / よこやま・こういつ

1940年、福岡県生まれ。70年、東京大学大学院印度哲学科修了。現在、立教大学教授。著書に、『唯識の哲学』『唯識とはなにか』『「唯識」という生き方』『唯識・わが心の構造』『十牛図・自己発見への旅』など。

2. 無分別智

前回「成りきる」ことについて触れましたが、このことについて考えてみたいと思います。

白隠禅師の「坐禅和讃」の中に、「一坐の功を為す人は、積し無量の罪滅ぶ」という一句があります。これは、一坐すなわち、わずか30分でも坐るとそれまで身についた無量の業の汚れがなくなってしまうという意味です。なぜそうなのか。これを唯識的には、「表層心の無分別智の火によって深層心すなわち阿頼耶識の中にある汚れた種子が焼かれて朽ち、心が深層から浄められる」と解釈することができます。これは、表層の心が深層心を浄化することになるという考えです。唯識の経論の各所に「無分別智によらないかぎり心は浄化されない」と力説されています。私も本当にそうだと確信しています。第1回目、若いとき円覚寺で過ごしたわずか1週間の生活が私の心のありようを変えたという体験を述べましたが、いまから考えると、無分別智がそのように私を変えたのであると言えるでしょう。

「無分別智」とは、何事をするにしても「自分」と「他者」とその両者の間に成立する「行為」との3つを分別しない智慧のことです。例えば、私がある人に布施をするという場合に、自分は物を施す「施者」であり、受け取る人は「受者」であり、その2人の間に「布施」という行為があると考えますが、その3つを考えることなく、行為に成りきって布施を行うところに無分別智が働いてきます。確かに私たちは普通、それははっきりと意識しないにしても、物を他人に与えたことによって相手に施しをしたのだという多少なりともおごりの気持が起ってきます。ここが恐ろしいところです。人に物を与えるという利他行によって逆に自我意識をより強めることにもなりかねないからです。だから、そのような思いで布施を行うのではなく、施者も受者も布施する行為も分別しない無分別智をもって布施を実践することを唯識は要請するのです。

この無分別智による行為は2つの働きをします。1つは他者に対して真に清らかな行為を展開します。もう1つは、前述したように、それがいわば火となって自分に跳ね返り、自分の深層の心すなわち阿頼耶識の中にある汚れた種子を焼き尽くしていきます。いま「火」と言いましたが、本当に無分別智という智慧は火の如きものです。ロウソクが燃えることを例にとってみましょう。ロウソクが燃えるとき2つ

のことが起こります。1つは明かりと熱を出す。もう1つはロウソク自体が燃え尽きていく。この喩えのように、無分別智という火を燃やして行為をするとき、それによって生じた熱が他者に対する慈悲の行為となっていくと同時に、自分の中にある煩惱というエネルギーが燃えて焼き尽くされていくことになるのです。これは本当に科学的な捉え方です。人間の心の働きもやはり自然の理に即しているのです。人々の中で、自他対立の世間の中で、相手に、行為に成りきって生きていくことによって執念なエゴ心が削られ、そこにより深い智慧が磨かれ、より広い慈悲行が展開していくことになるのです。

どうしたら執念な「自分」を、エゴ心をなくすことができるか。それは本を読んででも人から教えてもらっても決してなくなりません。それは「自分」をいわば融解させる行為、すなわち無分別智に基づく行為を通してしか果たすことができないのです。このことを信じて、無理でもよい、日常生活の中で、人々の中で、できるだけ無分別智になって行為をするよう努力を続けてみるならば、必ずや深層の心に潜むエゴに色づけられた種子が焼かれ、それによって表層の行為の中から徐々に「自分」への執われの度合いが薄れていきます。ここに実践の素晴らしさがあります。

3. 阿頼耶識縁起

「タバコのポイ捨て絶滅運動」と称して、ここ3年間、私の大学のキャンパス内で、有志の学生と昼休みに捨てられたタバコの吸い殻を拾って歩いています。わずか30分の間に、いつもなんと500本ほどの吸い殻を拾うことになります。現代学生のマナーのなさに、怒りを越えて悲しい気持になります。あの外国人にも賞賛された昔の日本人の礼節ある優雅な立ち居振舞いはどこに消え去ってしまったのでしょうか。

人は軽い気持でタバコをポイと捨てるのかもしれない。しかしその人はその行為がいかに重大な結果を引き起こすことになるかを知っていないのです。まず人間の行為は、1つは他者に対して、もう1つは自己に対しての2つの影響なり結果を生じるということを知る必要があります。タバコのポイ捨てについて言えば、それは、対他的には、路上を、自然を汚して美観を損ね、他者に迷惑をかけますし、同時に対自的には、その行為は必ずその行為者の深層心を汚すこ

とになるのです。タバコを捨てる人は、それほど意識していないにしても前者の結果には気づいていることではありますが、後者のその行為が自己を心底から汚しているということには気がついていません。本当にいかなる行為であろうとその行為は自分に跳ね返ってきて、深層にその影響を与えます。タバコを捨てるという表層の濁ったありようは必ず深層の心にいわば濁った種子を植えつけ、それが知らず知らずのうちに深層で成長発育して表層に芽をふき、濁った心が再び生じるのです。このように表層心と深層心とが相互に因果関係にあることを、唯識思想では「阿頼耶識縁起」と言います。これも前述した縁起の理の1つですが、静かに心の中に住して心のプロセスを観察すると、この阿頼耶識縁起という理が生き生きと働いていることに気づきます。そしてこの理に気づくならば、いかなる行為もあつそかにすることはできなくなります。こんなことぐらいと吸い殻をゴミと捨てる、人に分からないにしてもある人を憎いと思う、そのような行為や思いが度重なるにつれて、その人の心は心底からますます汚れ濁っていくことになるのです。本当に恐ろしいことです。

1つの行為がもたらす影響の重大性を説く「阿頼耶識縁起」説の宣揚が必要になった時代であると私は痛感しています。

4. 菩薩道

民族、風習、伝統、言語などがいかに違っていても、人間に共通の普遍的な目的があります。それは「幸福」を追い求めるという目的です。しかし人間は多くの場合、その幸福の求め方が間違っているために、いつも歴史は不幸な出来事の連続であったと言っても過言ではないでしょう。

授業の中で学生たちに「どういうときに幸せを感じるか」という質問をしますと、「好きな音楽を聴いているとき」「スポーツをしているとき」「親しい友人と語り合っているとき」云々と答えてきます。これらを分析すると、それらはすべて幸福と感じる感情であり、しかもそこにはそのように感じる「自分」という存在があります。そこで学生たちに、幸福であるという状況の主人公はいつも「自分」であるのではないかと、自分が幸せであることが本当に幸福であるのか、と問いたすことにしています。

もちろんそれは世間でいう幸せの一部であるかもしれませんが、

本当の意味で、もっと正確に言うと、深い充実した意味での幸福であるかどうかを再考察してみようではないかと学生に訴えています。

前回一人一宇宙じんじんゆいしきという事実を指摘しました。一人が1つの世界の中に閉じ込められ、お互いに存在的に分離した、だからこそ孤立した寂しい存在です。でもこの事実気づくとき、私たちは、だからこそ相手の立場なり状況を思いやる気持ちが湧いてきます。いまこの自分の世界は苦しい。それを実感し、そして一人一宇宙という事実を思い出して、眼前にいる他人が同じく苦しんでいるのを見る。そのとき、「この自分の苦しみと眼前の人の苦しみとのうち、どちらの苦しみをまず取り除こうか」と静かに深く考えてみると、不思議なことに、自分はどうでもよい、まずはその人の苦しみをなくしてあげようという気持ちがだれもの心の中に生じてくるものと私は信じています。

私は最近、存在の深い層から見れば、人間は本来だれしもが菩薩であると確信するようになりました。「菩薩」とは、「いったいなにか」という追求心を持ちつつ智慧を深めていながら、同時に生きとし生けるものを救済しようとする慈悲行を展開する、まさに理想的な人間です。釈尊は、仏陀になる以前にはそのような菩薩として生まれ変わり死に変わりして生き続けてこられたという信仰が、弟子たちによって生じました。「釈尊が菩薩として生き続けられた間に、人々に与えた骨の量はスメール山よりも高く、与えた血は四大海の水の量よりも多い」という原始経典の文句を読むたびに、私は感動を覚え、同時に自分のエゴ心の強さを恥じています。

もちろんこれは、弟子たちによって作られた物語ですが、しかしこれこそが、最高に理想的な、そして前述した深い意味での幸福を実現している生き方ではないでしょうか。

「菩薩の道を歩む」、言葉は仏教的な表現ですが、これは人類に普遍的な「人の道」であると私は信じるようになりました。前にも喩えとして出しましたが、ローソクの火は明るさと暖かさを与えながら燃え続け、そして最後に燃え尽きてなくなっていきます。私も、ローソクのように、与えられ、生かされてあるこの「いのち」というエネルギーを燃やし、明るさと暖かさを与え続け、そして最後に燃え尽きていくぞ、と自分に言い聞かせています。

「唯識」と「菩薩道」の宣揚　これが私に残された人生の目的です。